

# 輸入品割合は不況で 変わったか

季節的に国産で対応できない品目や輸入品が安いためにシエアを奪えなかった品目などは、この20年間の不況下でどう変わってきたのだろうか。一般的に言えば、社会的に安い商品が求められた時代だったのだから、輸入の割合は高まったと考えられる。加工業務用食材に関してはまさにその通りになったのだが、生

鮮品については何と輸入品が減っていくという逆の現象になった。ただし、それは品目によって事情が異なる。種苗や生産技術の革新で輸入を駆逐したのもあれば、意識的な作型の変化の導入で対応したもの、あるいは単に輸入品が敬遠されただけのものもあるなど、さまざまだ。

## アスパラガス

**【概況】**  
不況であっても国産率は向上へ、年間商材としての供給安定化を

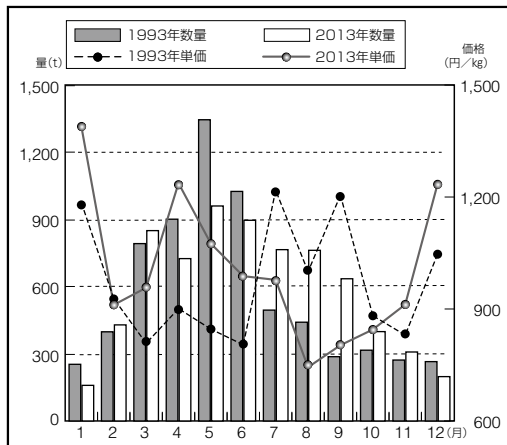
東京市場におけるアスパラガスの入荷を1993年対2013年で見ると、入荷量が4・4%増えて単価は8%も高くなった。93年にはトップが長野の25%で、次いで米国が16%だった。輸入品は、オーストラリアやタイなどを合わせると33%になる。13年では年明けから春先までのメキシコ産が増加しているが、春から秋までの長期出荷型の佐賀産によって、春の米国産、秋のオーストラリア産が激減した。

### 【背景】

入荷数量が増えて単価も高くなっているのは、明らかに国産比率が上がっていることを意味する。年間を通じて入荷が平準化し、しかも供給量の厚みが増している。これはひとえに長期出荷型の佐賀や長崎などを合わせて九州産が3割近くのシェアを持ち、夏秋には関東や東北産も増えているためだ。供給が周年化して全体の流通量が増加すると、ちょっとした端境も許されなくなる。いまや輸入品は、国産主体の流通を補完する役回りになりつつある。

### 【今後の対応】

現在では、アスパラガスが通年販売されていることに誰も疑問を持たない。かつて国産は4月から2カ月程度の季節野菜だった。そこに年明けからのメキシコ産などが初めて輸入販売されたのを契機に、輸入品が国内需要を作り上げ、その需要を国内産地が、食いついた。結果がいまの現状だ。代表的な緑黄色野菜であり、取り扱いも簡便、年間を通じて小売店に並んでいてリピートが期待できる。それが不況にも勝ったアスパラガスの位置づけだ。



## ブロッコリー

**【概況】**  
7割近い伸びでも単価は上昇傾向、輸入から国産への切り替えが顕著

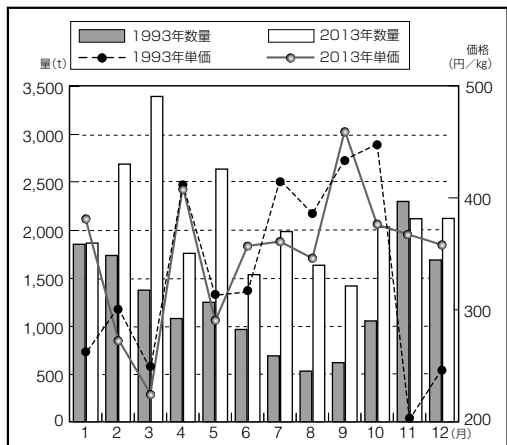
東京市場のブロッコリーの入荷は、93年と13年対比では全体の数量が67%も伸びて単価は4%高くなった。93年当時、輸入は米国産が8%程度で、埼玉、愛知の両主産地の補完的な立場だった。13年でも米国産は絶対量こそ増えたが、シエアは10%程度に過ぎない。しかし、その米国産は02〜03年には3割以上のシエアで断然トップ産地だった。が、それ以降の10年間は国産が成長して輸入が大幅に減少している。

### 【背景】

ブロッコリーは、不況が進行した10年間で輸入は8万tを超えた。それがいま、半減したのはかつて輸入の中心ブランド・ドルが北海道など全国の6カ所の直営農園で国産化を推進したことにあつた。加えて全国レベルで産地が増えたためだ。冬春産地の埼玉、愛知産が安定して伸び、夏秋期の北海道産が6倍以上、冬場の香川産、夏場の長野産も急増した。春に向けて入荷が減っていたものが逆に増え、全体として月ごとの入荷も確実に伸びた。

### 【今後の対応】

ブロッコリーは、93年以降の継続的な不況下で確実に輸入が増えた。市場入荷レベルでは単価が2割以上も安いことから、消費者、需要者双方からのニーズといえよう。しかし、10年前からは中国産農産物の食品事故を契機に、食の安全やトレーサビリティが焦点となり、国産志向が一気に盛り上がった。そこに夏秋の北海道産の拡大や、春秋作型の技術革新、冬場でも管理の楽なブロッコリーの露地物への転換などの要因が重なり、飛躍的に拡大した。



# 今年の市場相場を読む

冬場の輸入割合は依然として高い、ステッピングアップは夏秋産地の参入

## オクラ

【概況】

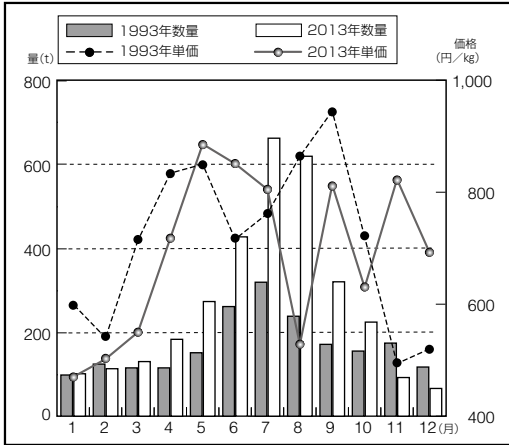
東京市場におけるオクラの入荷を93年と13年で対比してみると、単価はほとんど変わらず、入荷量は57%もの増加という成長ぶりだ。93年のトップ産地はタイで25%ものシェアがあり、続いて高知産が23%。フィリピン産も10%程度のシェアがあることから輸入品だけで35%を占めていた。それが20年後は、鹿児島産の入荷量が3倍以上も伸びて32%のトップ産地に、首位だったタイ産は4分の1に落ちた。

【留意】

輸入品のシェアはいまでは23%程度にまで縮小し、国産の代替傾向が見られるのが特徴とはいえ、冬場を中心にタイ産がフィリピン産に代わっており、2割近いシェアがある。フィリピン産はバナナ船に乗ってくるため、コンスタントでコストも安いという強みを持つ。夏場を軸に入荷量がほぼ倍増しているのは、従来から量のある高知産に成長してきた鹿児島産が加わっているからだ。一方、関東から東北の夏秋産地は意外に伸びていない。

【今後の対応】

この20年の不況下にあつてオクラが伸びているのは、供給面でいえば、冬場の生産コストの高い時期を輸入品に任せ、夏場以降に西の産地が供給を安定させたことにある。それによって単価は安定して消費促進を誘った。夏場の供給が増え、その結果として消費が伸びているのだが、要因としては近年の夏場における「ねばねば系食品」への支持と、夏場でも黒ずみなどの品質劣化を防ぐ鮮度保持技術が飛躍的に発展したことによるものだろう。



## サヤエンドウ

【概況】

東京市場のサヤエンドウはこの20年で入荷が75%も減った。統計ではキヌサヤから中サヤ、さらにスナップ系のもまで「サヤエンドウ」に分類されるため、こんな推移となる。93年当時に中国産のスナップ系の輸入増加が始まり、シェアはトップの26%に。その後も中国産は増え続け、06年ごろにはシェアも56%となった。ところが、直後に残留農薬違反で激減し、13年ではかつての1割程度に過ぎない。

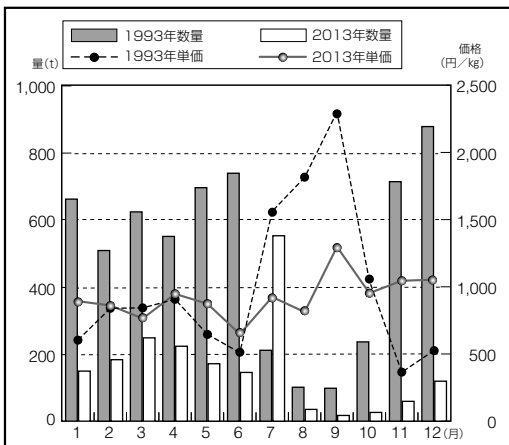
【留意】

同じような豆類であっても、煮物用中心のサヤエンドウは、煮物にも天ぷらにもお浸しにも向くインゲンに負けている。かつて中国産の影もなかった昭和60年代には、入荷量は9000tもあったが、長い不況下で業務用需要が高いキヌサヤを使わなくなったことに、生産者の高齢化による減産が拍車を掛けた。しかし、中国産スナップが小売商材として評価されると、「サヤエンドウ」としての入荷が急増したものの、中国産敬遠気運で一気に減少した。

スナップ系の増減が趨勢を支配、買いやすさを意識した生産拡大を

【今後の対応】

毒ギョーザ事件と相前後して残留農薬違反の摘発があるまで、不況が続いていたマーケットでは、中国産のスナップエンドウは安くておもしろいと評判の商材だった。過去20年間の推移からいえることは、これからの景気浮揚に際して、キヌサヤはかつての捲土重来は期待できないものの、スナップ系に関してはさらに成長が期待できる。すでに多くの産地で増産傾向が見られるが、中国産並みの単価は無理でも、買いやすさを意識した増産計画が必要だ。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。